「２１世紀ＣＯＥプログラム」（平成１４年度採択）中間評価結果表

機 関 名	國學院大學	拠点番号	Ｄ１６
申請分野	人文科学		
拠点プログラム名称 （英訳名）	神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成（Establishment of a National Learning Institute for the Dissemination of Research on Shinto and Japanese Culture）		
研究分野及びキーワード	<研究分野: 哲 学> (宗教学)(考古学)(神道)(日本文化)(国学)		
専攻等名	大学院文学研究科神道学専攻，日本文学専攻，日本史学専攻，日本文化研究所		
事業推進担当者	（拠点リーダー） 小林 達雄 教授 他 １９名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成１６年１月現在）を抜粋

＜本拠点がカバーする学問分野について＞
大学院文学研究科を構成する神道学、日本文学、日本史学の３専攻及び日本文化研究所が組織的有機的に連携して、本拠点がカバーする神道学・宗教学・宗教社会学・歴史学・文学・民俗学・考古学等の各学問分野から、日本の基層文化としての神道を研究し、神道を中心とした日本文化の諸相に関する（１）起源・本質、（２）歴史的展開と機能、（３）現代的意義等、を解明する。

＜本拠点の特色及びその目的等＞
本拠点の形成を担う大学院文学研究科と日本文化研究所は、神道を核とする日本文化を主に研究対象とし、生活実践的な一面を有する本学独自の国学的研究教育方法によって実績を挙げてきた。この特色ある研究教育方法と実績を全学的な支援のもとに有機的に連携・発展させ、「日本文化の総合的研究と発信のための世界的研究教育センター」の中核となる拠点を形成する。これは、日本の学術文化面における国際的な貢献及び国際社会での「共生・協調」のためにも必要かつ重要な事業でもある。

＜ＣＯＥを目指すユニーク性＞
神道や日本文化の独自性及び普遍性の探究や、研究発信に向けた本拠点の取り組みのユニークな点は、（１）神道に対する学術的・社会的理解を深め、「主体性を保持した寛容性と謙虚さ」という、神道の長所を世界的に周知させることを目指していること、（２）他の地域文化研究の方法論の中には、複数の文化的諸相を個別的に把握した上で体系化を図ろうとするものがあるが、本拠点では社会的な文化貢献という目標達成を重視し、当初から神道という明確な研究対象を設定していること、にある。

＜本拠点のＣＯＥとしての重要性・発展性＞
本拠点がＣＯＥとして重要であるのは、本学の学問・教育の基盤である国学的研究教育が日本文化を現代及び将来にわたって維持・継承し、日本人の有する文化的創造力を不断に発展させる使命を持つことにある。この国学的研究教育に基づき、神道に関する高度な研究と正確な発信を行うことによって、国内外での神道に対する歴史的文化的関心の高まりに的確に対応できるのであり、神道を中心とした日本文化の独自性と普遍性を明らかにする研究がより一層発展する可能性が高まるのである。

＜本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果＞
（１）本拠点が特色とする国学的研究教育手法による日本文化の研究成果によって、多様な人類文化の共生に寄与することができる。（２）日本文化に関する正確かつ体系的な情報発信システムの構築によって、内外の研究情報の相互交流に資し、より高度な知見が得られる。（３）神道を核とする日本文化の特色を生かした社会的意義を持つ研究を行う若手研究者の輩出が期待できる。

＜背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等＞
神道研究は国内外共に活発化しているが、学術情報の不足や正確性の問題等から研究の現状には改善すべき余地が多くある。本拠点に期待される研究成果は、神道の独自性の解明のみならず、多様な内外の交流を経た日本文化が有する世界に通用する普遍性を明らかにすることである。これにより一層の神道研究の進展が可能となるばかりでなく、神道の原点である「共生・協調」の文化を社会的国際的に発信し、もって日本の文化的貢献の一翼を担う意義・効果が期待できる。

機　関　名	國學院大學	拠点番号	Ｄ１６
拠点のプログラム名称	神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成		

◇２１世紀ＣＯＥプログラム委員会における評価

（総括評価）

当初目的を達成するには、下記のコメントに留意し、一層の努力が必要と判断される。

（コメント）

大学の厚い支援体制は高く評価できる。基礎的資料の収集をはじめ、当初目的の達成に向けての着実な努力は認められるが、真に世界最高水準の研究教育拠点となるためには、研究成果の海外発信について、一層の努力が必要である。COE研究員などへの採用が国学院大学内部に偏っており、公募制を採用するなど、若手の人材育成プログラムについて再考いただきたい。儒教や道教研究との連関、比較宗教学的研究の充実等についても、さらなる工夫を望みたい。また、近代以降の時期や神仏習合などの問題に関して、もう少し力点をおかれたい。